

令和元年6月15日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03072

研究課題名（和文）台湾海峡金門島・馬祖島から読み解く近現代東アジアの社会変動

研究課題名（英文）A Study about Contemporary History and Ethnography of Kinmen and Matsu Island in Taiwan Strait

研究代表者

山本 真 (YAMAMOTO, Shin)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：20316681

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、台湾海峡に浮かぶ金門島と馬祖列島の近現代史と島民の民俗誌を探求した。日中戦争時期、金門島は日本の支配下におかれ、馬祖は対日協力組織「福建和平救国軍」の支配下に置かれた。1950年代以降は、台湾の国民党政権により国共対立の最前線に位置づけられ、「戦地政務」と呼ばれる政策の下で、島民の戦時動員と経済開発が推進された。

つまり金門と馬祖は、20世紀以降日中戦争、国共内戦、台湾海峡危機、冷戦と、戦時態勢のなかに置かれたのである。1930年代から約半世紀に及ぶ時期、日本軍の統治や国民党政権による「戦地政務」が、地域の人々に如何なる影響を与えたのか、本研究では、現地調査に基づき検討を加えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

金門島は日本軍の統治の下、人馬の徴発や阿片の栽培が行われた。ゆえに人々の日本に対する歴史記憶は厳しい。1950年代以降には、国民党の「戦地政務」の下で、軍事管制と地域開発が推進された。管制は苛酷であり、島民の生活には多くの制約が課された。自衛団への服役義務に加え、1958年の砲戦では生命の危険に晒された。しかし島民は戦時態勢に順応し、軍人と共生していった。政府の戦地政務は、厳格であった一方で、経済的利益を得た島民はこれを肯定的に回顧している。現在も島民の国民党に対する支持率は高く、大陸中国との交流にも積極的である。日本人は、台湾政府の統治区内にこうした地区が存在することに注意を払うべきである。

研究成果の概要（英文）： This study attempted to analyze the contemporary history and ethnography of the Kinmen and Matsu Islands in the Taiwan Strait from the outbreak of the Sino-Japanese War through until the Cold War era. During the Sino-Japanese War, the Kinmen island fell under the jurisdiction of the Japanese. And the Matsu Islands were administered by the collaborationist Fujian Peace and National Salvation Army. After years of protracted war, the Chinese Communist Party took control of mainland China. In 1950s, the Taiwan-based Kuomintang government utilized the Kinmen and Matsu Islands as a frontline of defense against their Communist and adopted a so-called 'battlefield administration'. Under this administration, islanders were mobilized and economic development was pursued. These islands thus became a key frontline of defense for the KMT for many decades. Based upon original field-based research, this study sought to understand how the inhabitants of these islands survived turbulent times.

研究分野：中国近現代史

キーワード：金門 馬祖 台湾海峡 中国現代史 冷戦 国共内戦 国民党 共産党

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究代表者山本は、これまで、共産党による革命や国民党による国家建設が、同族結合が強い福建の社会構造にいかん規定されたかを、現地調査に基づき検討してきた。さらに、政策史研究を乗り越え、近現代福建における社会・文化の変容を下からの視点で考察するために、華僑の送り出し地(僑郷)と移民先における双方向的調査を実施した。これに加えて日中戦争時期における福建の人々や東マレーシア・サラワク華僑による抗日活動及び対日歴史記憶などを研究してきた。以上に通底する問題関心は、近現代中国における上からの国家建設・国民統合が在地の社会構造といかなる緊張を孕みつつ進展したのか、また激動の時代において一般民衆は何に依拠し自らの生存を図ったのか、を解明することであった。つまり中国近現代史のマクロな問題に関連付けながら、地域レベルでの国家・社会関係の変容、人々の生存への営為をミクロに且つリアリティをもって分析することに努めてきたのである。今回の科研計画では、従来の諸研究の延長線上に位置づけられ、かつ現地調査の経験を活かせる研究対象として、台湾海峡に浮かぶ金門島・馬祖島を選択した。ミクロな「場」を事例とし密度の濃い調査を行うとともに、そこから垣間見える東アジアの近現代史の特徴をマクロに考察する戦略をとった。

2. 研究の目的

台湾海峡の中国沿岸部に浮かぶものの、1950年代以降も国民党政権の統治の下に置かれ国共対立の最前線となった金門・馬祖島の近現代史、特に社会変動を解明した。両島は日中戦争時期には日本軍・対日協力政権の統治下にあった。ゆえに日本による対華南占領政策を考察する事例研究となる。さらに冷戦時期には台湾に拠る国民党政権の「戦地政務」政策により戦時動員と開発政策が推進された。本研究は1950年代以降の海峡兩岸での国家建設や民衆動員を「戦時態勢」から比較する構想の一部でもある。日中戦争、国共内戦、1950年代以降の冷戦の時代を経て、地域の伝統的社会組織・文化がいかに変容あるいは持続したのか、また一般民衆がどのように生き抜いたかを「下からの視点」で考察した。

3. 研究の方法

中国国民党史や福建省の地域社会史、福建華僑史を研究してきた山本真、沖縄や台湾をフィールドとする民俗学者の武井基晃、そしてボルネオの華人社会を研究する社会人類学者の松村智雄が協力し、さらに漁民社会の歴史・民俗を研究する胡艶紅が調査を補助するという学際的研究体制をとった。方法論的には、歴史学(文献読解)と民俗学・社会人類学(フィールド調査)を融合した。言語については、全員が中国語での聞き取り調査を行う能力をもっているという利点を活用した。メンバーが分担して金門島、馬祖島などでの現地調査を実施し、調査に当たっては金門大学閩南文化研究所、馬祖島の連江県文化局から協力を得た。

4. 研究成果

2016年度

2016年7月に研究代表者の山本真、分担者の武井基晃、松村俊雄、研究協力者の胡艶紅が筑波大学で会合を開き、それぞれの分担内容の紹介、現地調査での調査項目の内容についての議論・相談を行った。それを踏まえて8月から9月にかけて金門・馬祖島での現地調査及び台北での文献収集を行った。

研究代表者の山本は胡艶紅とともに馬祖列島へ赴き、地元の連江県政府文化局や郷土史家の協力を得て南竿島、北竿島及び東引島で調査を実施した。調査項目は島民の民俗宗教、漁業民俗、

また国共内戦・冷戦の最前線となった馬祖島の歴史に関する住民の記憶であった。さらに山本は馬祖列島から金門島に移動し、武井、松村とともに金門島での歴史・民俗調査を実施した。これには金門大学閩南文化研究所の協力を得た。山本は日中戦争時期の日本軍占領時期、冷戦下の島の社会状況について聞き取りと文献収集を行い、また漁村を訪問した。松村は金門島での僑郷についての調査を実施した。武井は、金門島において冷戦での砲戦の遺物である大砲の鋼鉄から包丁が作成された経緯や技術を調査した。具体的には、今日の台湾領金門島で、かつて中国軍から国共内戦時に撃ち込まれた砲弾を原材料として包丁に加工した金門鋼刀という観光名産品について、その製造工程を、今日の戦跡観光と合わせて調査した。加えて、山本は台北の国家档案局、国民党党史館、中央研究院図書館、国家図書館、国史館において科研テーマに関係する文献資料の収集に努めた。

2017年3月には福建師範大学の林国平教授を筑波大学に招聘し、福建の民間信仰や民俗についての報告を受けるとともに、2018年夏に予定している馬祖列島と福州沿海部との人的交流、歴史上の移民研究について意見を交換した。

2017年度

研究代表者の山本は、研究協力者の胡艶紅とともに2017年8月に馬祖島列島で当地の歴史及び漁業民俗についての資料収集と聞き取り調査を行った。さらに山本は日中戦争時期の台湾総督府による金門を含む福建政策に関する資料や、冷戦時期の金門・馬祖に関する資料を、台北で収集した。訪問した図書館・文献館は、国民党党史館や国史館、台湾大学図書館、国家図書館などである。胡艶紅は、福州へ渡り、福建省から馬祖列島への移民のルーツを探求した。その他、山本は、2017年11月に廈門大学を訪問、図書館で日中戦争時期日本軍による廈門や金門島占領に関する資料を収集した。

研究分担者の武井は、金門島において冷戦での砲戦の遺物である大砲の鋼鉄から包丁が作成された経緯や技術を調査した。具体的には、かつて中国軍から国共内戦時に撃ち込まれた砲弾を原材料として包丁に加工した金門鋼刀という観光名産品について、その製造工程を、今日の戦跡観光と合わせて調査した。加えて、武井は9月に、金門島の島内各地で旧暦7月の普渡儀礼の調査を実施した。具体的には、普渡儀礼を島内の複数の集落で調査した。家単位あるいは集落・廟単位で、多彩で豊富な供え物(実際の食品・料理、および冥界で通用する金品)を用意することで、現世に生きる人びとは、その祖先および孤魂(無縁の霊)と直接的な交流の場を設けていることを確認できた。また、金城地区の地下にある防空目的の坑道施設の視察も行った。

松村は、2017年6月4日~6月8日中国福建省(廈門及び福建省の泉上華僑農場)にてインドネシア(主にアチェ)からの帰国華僑の調査を行った。さらに、2018年2月2日から2月15日、ブルネイ・ダルサラーム、特に首都バンダル・スリプガワンでの、金門島出身者、福建の文化の継承に関する調査を実施した。金門島との関わりでは、比較的新しい時代に移動してきたこと、例えば、1954年に金門から父が移住してきた林CY氏の場合、最初はクーリー、運搬業、小さな商店を営むところから始めたこと、1960年代から華人がブルネイの産業を支えたこと、華人の組織では、福建会館、海南会館、福州会館、客家会館などが存在していること、などを明らかにした。

2016年度と2017年度までの資料収集の成果を中間的に発表するため、2017年12月9日に「国際workshop 冷戦構造下、台湾海峡金門・馬祖島の歴史・民俗的研究」を筑波大学人文社会学系棟において開催した。その際には、金門大学の戚常卉副教授を報告者として招聘し、「戒嚴時期金門高粱酒的社会生命」との題目での報告を賜った。併せて、研究代表者山本と研究協力

者胡艶紅は共同で「近現代、馬祖列島の歴史・民俗的研究」と題して、分担者の武井は、「金門島の砲弾鋼刀 - 國共内戦の戦争遺跡中生命力強靱強的特産国際」、松村は、“International relocation of Chinese under the Cold War: A case of returned overseas Chinese from Aceh, Indonesia in Fujian Province, PRC”と題する報告を行った。ワークショップでは、各自の報告に対して討議を行うとともに、冷戦構造下の台湾海峡の諸問題について議論を展開させた。さらに金門大学の戚副教授をも交え、今後の研究方向についても話し合いを行った。

2018年度は、過去2年間の現地調査や資料収集の成果を整理し、学会報告に重点を置いた。また中国や台湾の研究者を招き、討論の場を設けた。山本は、2018年6月16日に東京大学駒場キャンパスで開催された日本華南学会の年次例会において、「台湾海峡、馬祖列島の近現代史と島民の生活誌 - 日中戦争時期から冷戦時期までを中心に」を報告した。20世紀前半における馬祖島の民衆生活と日中戦争、冷戦との関係を論じた内容である。11月18日には、金門歴史民俗博物館で開催された『閩南文化、島、博物館国際検討会』において、「台湾海峡馬祖列島の近現代史と戦争 - 以中日戦争時期到冷戦時期為中心」を報告した。また台北の中央研究院、国家図書館などで本科研関係の資料を収集した。続いて、11月24日(土)には、筑波大学筑波キャンパスに廈門大学の周雪香教授を招聘し、「廈門陥落時期、日本の阿片専売政策」との内容の報告を得た。そこでは、日中戦争時期の金門での阿片栽培に言及された。12月9日には廈門の華僑大学で開催された『第四届 婆羅洲華人研究国際學術検討会』に参加し、「中日戦争時期，砂拉越華僑籌賑祖国難民運動中祖国中国之表象化」を報告した。そこでは金門島からサラワクに移民した華僑の動向を論じた。あわせて廈門市図書館及び廈門大学、華僑大学の図書館で本科研に関する史料収集を実施した。さらに2月2日には、台湾大学の羅士傑氏を筑波大学筑波キャンパスに招聘し、本科研テーマとも関係する1940年代の福建海岸の海賊問題について講演を受けた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

山本真「中国近現代社会史研究の現状と課題」(『研究中国』7号、2018年10月)、16~21頁、査読あり。

山本真「歴史から見る中国の国家・社会関係、集権と分権」(『東亜』614号、2018年8月)、90~97頁、査読無し。

武井基晃「金門島の爆弾鋼刀 国共内戦戦跡のしたたかな名産品」『歴史人類』46号、2017年、35~47頁、査読無し。

松村智雄「1950年代西カリマンタン華人社会における学校教育」『アジア太平洋討究』27号、2016年、213~229頁、査読無し。

Matsumura, Toshio “Causes of lingering communist movement after Indonesia’s September Thirtieth Movement: the case of border area between Sarawak and West Kalimantan”, *Asian Ethnicity, Vol 19, 2018*, pp.235 - 250.査読あり。

〔学会発表〕(計 10 件)

山本真「中日戦争時期、砂拉越華僑籌賑祖国難民運動中の祖国中国之表象化以及運動實際情況」『第四届 婆羅洲華人研究国際學術検討』2018年12月8日~9日、中国廈門市、華僑大学。

山本真「台湾海峡馬祖列島の近現代史と戦争：以中日戦争時期到冷戦時期為中心」『閩南文化、島、博物館国際検討会』2018年11月18日、台湾金門県、歴史民俗博物館。

山本真「台湾海峡、馬祖列島の近現代史と島民の生活誌 - 日中戦争時期から冷戦時期までを中心に」日本華南学会 2018年度年次例会、2018年6月。東京大学駒場キャンパス。

山本真「近現代、馬祖列島の歴史・民俗的研究」国際 workshop 冷戦構造下、台湾海峡金門・馬祖島の歴史・民俗的研究」2017年12月9日。筑波大学人文社会学系棟。

武井基晃「金門島の砲弾鋼刀 - 國共内戦的戦争遺跡中生命力強靱強の特産国際」『国際 workshop 冷戦構造下、台湾海峡金門・馬祖島の歴史・民俗的研究』2017年12月9日。筑波大学人文社会学系棟。

Matsumura Toshio, International relocation of Chinese under the Cold War: A case of returned overseas Chinese from Aceh, Indonesia in Fujian Province, PRC.」『国際 workshop 冷戦構造下、台湾海峡金門・馬祖島の歴史・民俗的研究』2017年12月9日。筑波大学人文社会学系棟。

山本真「通過基督教伝教師文書解読 20世紀初め閩西社会と革命運動」「馬克思主義在中国的伝播与实践学術検討会」2017年11月8日、中国福建省廈門市、廈門大学馬克思主義学院。

山本真「1940年代四川省的地方民意機関と秘密結社」「第一届中国社会史論壇」2017年9月26日、中国四川省成都市、四川大学。

Matsumura Toshio “ Indonesian Intellectuals ’ Experiences and China ”, International Conference on Comparative Chinese Studies: South Asia and Southeast Asia in Comparative Perspectives, 2016年11月25日タイ、バンコク市、Chulalongkorn University

山本真「1949年前後、共産党による軍事的勝利と在地勢力 福建省の事例から」アジア政経学会、2016年11月19日、北九州市、北九州国際会議場。

〔図書〕(計 6 件)

山本真「地域防衛と結衆の原理」(内山雅生編『中国農村社会の歴史的展開』御茶の水書房、所収) 229~247頁、2018年。

山本真「キリスト教の革新運動と教会の政治化」(笹川裕史編『戦時秩序に巣喰う声 - 日中戦争・国共内戦・朝鮮戦争と中国社会』創土社、2017年、所収) 307~342頁。

山本真「郷里空間の統治と暴力 危機下の農村における共同性の再編と地域自治政権」(小嶋華津子・島田美和編『中国の公共性と国家権力 その歴史と現在』慶應義塾大学出版会、2017年、所収) 105~130頁

松村智雄『インドネシア国家と西カリマンタン華人: 「辺境」からのナショナリズム形成』慶應義塾大学出版会、全321頁、2017年。山本真『近現代中国における社会と国家 福建省での革命、行政の制度化、戦時動員』(創土社、2016年)全461頁。

山本真「日中戦争前期、サラワク華僑の救国献金運動と祖国の表象」(関根謙編『近代中国 その表象と現実 女性・戦争・民俗』平凡社、2016年) 156~183頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 武井 基晃

ローマ字氏名: TAKEI, Motoaki

所属研究機関名：筑波大学
部局名：人文社会系
職名：准教授
研究者番号(8桁): 00566359

研究分担者氏名：松村 智雄
ローマ字氏名：MATSUMURA, Toshio
所属研究機関名：法政大学
部局名：人間環境学部 講師
研究者番号(8桁): 30726675

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。